関西自然保護機構会報 *20*（*2*）：*109－113, 1998*

歴史的環境民俗学のすすめ

京都大学名誉教授　四手井　綱　英

ESSAY FOR PROPOSED HISTORICAL ENVIRONMENTAL ETHNOLOGY

Tsunahide SHIDEI *Emeritus Professor of Kyoto University*

歴史的環境民俗学試論（序）：わら工品のこと

先日民族文化映像研究所を造って，“木地屋”とか“さるまわし”とか，色々な日本の古い文化を映画で残そうとしている姫田忠義君から来信があった．その手紙に稲わらを用いた色々な工作物の映像を残すことにしたと書いてあったので，敗戦後，中国の湖南省にある洞庭湖の付近に終結した部隊の兵士のわら工品の話しをふと思い出して，そのあらましを姫田君に書いて送った．氏から折り返し返事があって，わら細工作は稲作地帯なら何処にでもあるものだと思っていたが，そうでもない事を始めて知ったと記してあった。

洞庭湖周辺に敗戦後終結した部隊の話しは，ざっと次の様なことだ。日本が戦争に負けてから，私がその直前から勤務していた漢口にあった方面軍司令部は，揚子江の南部の各省に広く展開していた部隊を漢口に近い揚子江の近くに全部集結することにした。その時の中国軍は現在の中国軍ではなく，台湾へ逃げた蒋介石の部隊であったが，日本の軍人の他居留していた多数の一般人も含めて，方面軍で管理することになり，主食の米は現物支給，副食は金をくれて，市場で自由に買うと言う方式を出して来た。ところが，時がたつにつれて，主食の米の現物が湖南の米どころでもうまく集められなくなり，支給がとどこおり勝ちになって来た。そこで，洞庭湖周辺の米どころに集結した部隊は，農業経験のある兵士を付近の農村へ労働にやることになった。働きに出ると，農家は少なくとも２食，時には３食共くわしてくれ，それだけ現物支給の米の不足が補える。これは日本人にも管理する中国側にもよいので，大いにはやった。

働きにいっていた日本兵が，一大稲作地帯であるのに，何等わら製品のないことを発見した。わら縄やむしろすらない。もちろん，ぞうりやわらじ等のわら細工のはき物もない。そこで，兵士達で作り方を知っている連中が，色々なわら工品を造って，展示，即売会を開いたところ，大変好評で製品は皆売れてしまったという。さらに製作の仕方を教えることになり，部隊が日本へ帰るまで，付近の農村でわら工品の作り方を指導して来たと言うことだ。

私は登山のことなどで一頃しばしば北京へ行ったので，一度武漢を訪ねて，洞庭湖付近の農村にわら工品を作ることが定着したかどうかを視たいと思っていたのだが，行きそびれてしまった。一般には稲作地帯なら何処でもわらを使った工作品が種々あるだろうと考えるが，どうもそうではないらしい。むしろわら細工は日本特有のものではないかと思われる。わら工品がないのは湖南の中国の大稲作地帯だけではないらしい。

詳しく調べたわけではないが，タイの稲作地帯へはよく行ったが，わら工品を見たおぼえがない。そこで此のようことを考えたのだが，それが正し

いか否かは今の所私には判断がつかないので，皆さんの御意見を伺いたい。それは中国でも，タイやベトナムでも，米の収穫には「穂刈り」と言う方法が永らく続いていたと言うことだ。穂刈りは稲の稔った穂先だけを手鎌で刈り採って，それを集めて，脱穀する．残った稲わらの部分は水田に立ったまま残されるが，この稲わらは，牛や水牛にくわせて，糞を水田に落すことにより肥料化する．家畜の放牧によるわらの肥料化で，稲わらは無駄なく使われるのだが，わら工品を作る稲わらは残らない。

日本でも牛は水田農家で飼っていたが，他国のように，水田跡などに放牧することはなかったのではないか。一般には畜舎につなぎ飼いして，稲わらも草と共々あたえてはいるが，わら全部を飼糧に使うことはない。また，ずっと以前は穂刈りをやっていただろうが，家畜の飼い方の違いから，わらの多様な利用が始まり，株の根ぎわから，刈り取る方策が早くから取られていたのではなかろうか。

くわしく調べたわけではないが，稲作が日本に入った始め頃の石斧の鎌を見ると，どうも穂刈り用らしく思われる。今はほとんど機械で刈り取られるようになったが，その前に手鎌で刈り取っていた時代の歯が鋸のようなギザギサになった稲刈り専用の鎌は何時頃，発明されたものだろう．くわしく調べて見たい気がする。穂刈りをやめて，根ぎわから株立ちのわらを穂付きのまま刈り取ることにより，わらの多様な利用が出来るようになったことはたしかだろう。穂刈りをやめたことで稲わらの多様な利用が始まったのか，稲わらを牛の飼料以外に多用するため，穂刈りがやめになったのか，原因と結果の関係はどちらが先かは今の所私には判断がつかないが，穂刈りがわら工品の製作と大きな関係のあることだけはたしかではなからろうか。

タイの水田地帯へ行くと，牛や水牛を水田跡で採食させている牛飼いは，たいてい子供だ。かなりの頭数をむち一本で追いながら水田跡で働いている子供の姿は日本では見たことがない風景だ。

歴史的環境民俗学試論（破）：馬屋猿のこと

この話は一度日本モンキーセンターの「モンキー」と言う機関雑誌に投稿したことがあるが，先の穂刈りの問題のついでに，ここで再録しておきたいと思う。馬屋（厩）猿はわが国で広く信じられている。猿が馬屋の神様なのだが，私は日本の馬の主力は元々中国あたりから導入されたものであろうと考える。日本にも木曽馬などの古い在来馬がいるから，馬屋猿も日本で生れた話しだとも考えられないことはないが，多分中国北部の騎馬民族により馬と共にわが国に導入されたのだろうと思っていたのだが，そのしっかりした証拠は持っていなかった。

ところが，私が奈良市の委員をしていて，市役所へ行った時，市役所の展示室に，銅製で，人が乗った馬の水差しがあるのを見付けた。その展示物の説明を読むと，奈良市と姉妹都市になった韓国の慶州市からのおくり物で，出土したものの模造品らしかった。馬に乗っているのは人だということになっているらしいが，私にはどう見ても人ではなく，猿だとしか見えない。第一着物を着ているとは思えないし，足も裸足のようだ。そこで奈良市の人にお願いして，ガラスの箱から出してもらい，手に取ってよく調べたが，私には人より猿だと見た方が正しいという結論になった。即ち「馬乗猿の水差し」と言うことになる。

韓国には昔から猿はいないから，この水差しが「馬乗り猿」だとすると，中国の北部の騎馬民族により持ち込まれた可能性が高くなる。即ち，猿は馬に乗って，中国北部の騎馬民族により朝鮮へ

もたらされ，海を渡って日本に来たことになる。そう考えると，有史以前には中国の北部の蒙古地帯にも猿がいたらしい．化石が少しだけ出て来るらしいが，騎馬民族が盛んに行動した時代に猿と馬との関係を作り上げた可能性はなきにしもあらずだ．蒙古地方に猿がいたのはもっと昔の話のようだから，猿と馬との関係は，やはりいわゆるシルクロードを通って来たものと考える方が良いだろう。そう考えて来ると，元はインドで出来た猿と馬の関係で，それがはるばる日本まで伝わったと見るのが，最も妥当な考え方のように思われる。シルクロードで，猿と馬との関係で有名なのは，三蔵法師の印度への旅に従がった猿の孫悟空だろう。しかしこの場合は，中国から出発した時すでに猿の孫悟空が従がっていたのだから，印度原産ではない。しかし法師の乗った馬と，猿の悟空の関係は，猿と馬との関係と考えてもよく，この話の前にすでに，猿は馬に従がって印度から中国へ来ていたのかもしれない。

こんな色々な空想を楽しみながら，私は中国の登山協会の招待でシルクロードをカシュガルからパミール高原まで行った時，道すじの町や村で老人に会うたびに猿と馬の話を聞いてまわった。しかしサルとウマの話が残っていないかどうかは，とうと解らなかった。そんな昔話は聞いたこともないし，あったとして残っていないだろうと言うのが，町や村の老人の返事だった。そんな話は恐らくシルクロード沿いの住民が仏教徒で，方々に仏教の寺などがあった時代のことだろう。シルクロード沿いの仏教遺跡は，西からイスラム教徒が大量に移住して来てシルクロード沿線から仏教が追い払われてしまった結果，仏教に関係のある伝説や昔し話と共にすっかり失われてしまったと言う。現在の老人達はイスラムに変ってからの寓話や伝説などは知っている．しかし，その前の仏教時代のことは何一つ伝わっていないと言うのが，誰からの答でも一致していた。もちろん，悟空や三蔵の話などは全く残っていないから，猿と馬の関係など全く知らないと言っていた。

これでは，猿と馬との関係がインドで生じ，シルクロードを通って朝鮮半島を日本まで伝って来たと言う私の仮説は，そう簡単には証明出来そうにもないと，なかばあきらめていた．しかし，これも大分前のことになったが，ある日ふと見ていた民放のクイズ番組で，インドの北部では馬屋をきれいに保つために，ある動物を馬屋で飼っているが，その動物は何でしょうと言うクイズが出て来た。答は「猿」であった。調べれば分かるのだが，この放送が何時だったか，民放が何処だったかは，その後調べていない。とも角，発祥地のインドでは，猿は実用的に馬屋をきれいにしてくれる動物だったが，シルクロードを通っているうちに，馬の神様に変って，「馬乗猿」として日本に現われたと言うことらしい。朝鮮半島まで来た時は，水差しになるほど馬乗り猿は神様に変っていたと言ってもよい。

シルクロード沿いにも，以前は猿と馬の話は残っていたと思うが，イスラムと言うきびしい宗教は仏教の時代をすっかり消してしまった。今方々で仏教遺跡は発掘されているが，現世では，シルクロード沿いのイスラム文化圏で仏教は一切残っていない。日本の仏教はこういったきびしいことをしない宗教だったから，原始宗教が今でも残っているが，キリスト教国も，イスラムと同様，そういった元の信仰を邪教としてすっかり消してしまった。これは恐ろしいことだと思う。小乗仏教国のタイでも原始宗教が残っていて，バンコックの各家でも精霊を祭っている．道路わきには，道で死んだ人々が「ピー」と言われる霊になって宿ると言われる祠が方々にある。農業で祭る神もどうも仏様でないのも日本とそっくりだ。サルと馬の来た道は，きびしい新しい宗教に途中は消されてし

まったとは言え，インドで起り，シルクロードを伝わって，日本まで来たことは概ね確かだろう。同じ様な話にカッパと馬の話があるが，この方も恐らくやはりインドあたりで起こり，海上の道を伝って日本まで来たのではないかと思われるが，まだ調べていない。

歴史的環境民俗学試論（急）：落葉広葉樹林文化

最近青森県の三内丸山での大規模な縄文時代の集落跡が発見されて考古学上大きな話題になっている。最近まで弥生時代の稲作文化を日本最古の農耕文化とする考え方が主流であったが，縄文時代の農耕文化の存在が方々の発掘調査で次第にはっきりして来た．即ち，落葉樹林帯に中心のあった縄文時代の文化が，弥生時代の稲作中心の日本文化の成立以前に，狩猟・採集の時代に始まっていたと考えるのである．現代では暖温帯照葉樹林帯に位置する西南日本の方が人口が多いが，縄文時代には文化の中心が日本の北東部に片寄っていて，西南日本よりかなり多い人口を東北日本が擁していたことが次第に明らかになって来ている。即ち落葉樹林帯の方が住み易かったらしいのだ。

何時だったか，大分以前のことになるが，調査のついでに青森市内にある郷土博物館に立寄ったところ，あるコーナーで，縄文土器の破片が沢山集めてあった．同時に，粘土で作った平板を設備し，色々な縄片をころがしてその粘土板に縄文を作って見ることを子供にやらせていた。私は縄文土器の片が無雑作に積み上げられているのを見て，こんなにして置いたら持って帰る子供も多いだろうと，掛りの人に尋ねたのだが，その人はこんなかけらなら，青森では何処でも沢山出て来るから，持って帰えられても平気なんですと返事をしていた。ことほど左様に青森方面では縄文遺跡が多いらしいのだ。

この青森地方の縄文遺跡の住居跡は，考古学的発掘で出て来る。今日では，直径１ｍを越えるようなクリの大材で造った，物見やぐらか祭壇か分らないが，大きな高い建物跡や，縦穴住居跡も大小多数発見されている．食物については，骨やどんぐりなどが多数出土し，その様子を概ね解明出来る．しかし，材木や食物の背景を成す，肝心の気候については直接的遺物は何も出て来ない。誤解を回避するため言い換えると，気温，雨，雪の化石や直接的遺物は出てこない．

落葉広葉樹林帯，あるいはブナ帯とかナラ帯とか言われる冷温帯は，冬の気温が低い．わが国の冷温帯では，大陸との間に日本海という手頃の広さの海があるため，大陸から日本列島へ吹き渡る，主に北西風の冬の風は，低温の上に日本海で適当な水蒸気をふくんで，日本海側の列島へ吹いて来る。その上この風は，列島の背骨になる2,000ｍを越える背梁山脈にぶつかって上昇するため，日本海沿岸から背梁山地にかけては毎冬多量の降雪をもたらす。雪は地上に積もり，積雪となって，人の生活に大きな影響を及ぼす。積雪の人の生活への影響は，文明の進んだ今も変わらない。もちろん，影響は人の生活だけではない。植物にも，動物にも大きな生活上の影響を与えている。

積雪には二つの顔がある。一つの顔は雪圧であって，積雪に埋まる物に物理的な圧力を及ぼす。この雪圧はさらに二つに分けられる。その一つは雪崩のような動的な力と，もう一つは，沈降力などと言われる静的な力だ。第二の顔として，積雪は氷と空気からなる多孔質の物質であるので，保温効果が大きいことがあげられる。この積雪の保温効果は，雪に埋まることで発揮される．積雪深約50cmを越えると，おおよそ外界の冷たい空気は遮断され，雪中では極端な低温の寒さが防げるのだ。このことはもう方々で書いたので，誰でも知っていると思う。ところが積雪の有無は考古学的に

は何処にも遺物が出て来ない。毎年春にはとけてしまい，跡かたも残らないからだ。しかし積雪の人の生活への影響は，今も昔も変わりなかったことは確かだろう。

積雪の最も大きい影響は，今も昔も交通が著しく不便になることだ。交通が自動車や鉄道に変わった現代でも，積雪は交通に著しい影響を与えている．徒歩以外に交通の手段がなかっただろう縄文時代でも雪の上を歩くことはすこぶる困難で，人々は冬の間，家内か集落の中ぐらいしか出歩かなかったに違いない。無理して遠出して，吹雪にでもあえば凍結してしまうだろう。縄文時代に住居を密集させ，集落を造って生活するようになったのは，冬の積雪が主な原因ではないかと私は考えている。冬の生活を考えると，孤立して各人がばらばらで生活するより，集まって暮らした方が楽なことはすぐ分るだろう。貯蔵食糧にしても，燃料にしても，各家でてんでばらばらに集めるより協力して集める方がよいし，互いのコミュニケーションも近くに集まって暮らせば楽だ．冬の仕事は出歩かず家か集落でやれるものにすれば，これも集まって楽しくやれるであろう。例えば，土器の製作，織物，木彫りなどは良い仕事だし，もっと楽しめるのは，祭ではなかったかと思われる。冬は皆家にいるから，村人がこぞってやれる祭は，雪が降っても積っても楽しくやれたに違いない。

縄文時代にだけ発達した火焔土器のような装飾のすごく多い土器（主に祭器だったのだろう）が発達したのも，積雪のある冬の生活があったからではないかと想像している。また首飾や耳飾のような玉などの根気のいる仕事も冬の仕事だったように思われる。しかしこんなことは皆私の空想で，証拠は何も残っていない。雪は融けてしまえば何も残さないからだ。さらにその頃の食糧や毛皮を得るための狩猟には，積雪は大変役立った。特に春近くなってから，地上を歩行する動物は皆雪上に足跡を残すから，追跡が容易だ。真冬は降雪で消えることがあるが，降雪が少なくなった春先は，けものばかりでなく，ヤマドリやキジなどの鳥類も足跡を残してくれるから，弓や槍を持って追跡すれば，えものは容易に獲れた。これは無積雪地方にはない特色であろう。無積雪地方の照葉地帯では足跡を追えないので，専ら，けもの道にたよった罠猟が行われ，発達した。けものの種類によって掛ける罠が異り，掛ける場所も違うようだ。今でも沖縄の西表島でイノシシをとるのは専ら罠猟だ。

雪や積雪は近代ではじゃま物あつかいをされがちだが，最近になって雪国がもう一度見直されはじめた。雪や積雪をじゃま物にして，雪国も無積雪地帯と同じように冬も働けるようにするより，雪国らしさをもっと強く表現した方が良いし，雪をもっとうまく利用した方がよいのではないかとかんがえられ始めている。観光のため，吹雪の中を馬そりで雪道を走るとか，いろりのある客用の食堂を造るとか，色々と考えられ得る．雪をとかした冷水を地下に溜めて，夏の冷房に用い，今度は夏の冷房で暖かくなった水で冬の雪をとかすような雪の利用や，雪で低温室を造り，野菜や酒を貯蔵するのに使うことも考えられている。雪国の冬の生活を考えなければ，東北地方や日本海側で発達した縄文時代の落葉広葉樹林文化は考えられないと言うのが私の主張だが，残念ながら雪は考古学の直接的遺物を何も残していないのだ。

以上の考察は直接は自然保護には関係しそうにないかも知れない．しかし，環境を考える上からは，こうした歴史的，かつ民俗学的な思索も必要なことが起こるのではないかと思い，あえて私説を述べたまでである．歴史的環境民俗学が成立し得るか否かは定かでは無い．御批判をこう次第である（9月の敬老の日に）。